梅美婦祢二編 上

特
遠13
841
4

遠18
141
4

明治三六年
十月十八日
購求

梅二編序

梅二婦人編序

人一家之元祖梅屬也

辰巳園年開隣りい来る

乃四月之芳恵ひく英代いろの興

味いよ〳〵婦人の生ちよ蘭亭遺ろ梅

美姫梅美人は高洗梅人

事を掘元をこそふたりより高尾社中よりくる
まで。日本田中き大平一流
通り棒ゝ。なぐ形ゝ。唐土堂の墨へも。
清貞賞ゝ。なぐ米八姫の娘きくまつ
古今の果報者。春雪ぶ山園ぐよう。
米八の所行をとゝめ山と

改名せ。歌妓の現ゆ五ふ川ふ
郭ゝ。せ川ゝ。気の良の茂ゝ茂ゝ頭
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ世ゝ。佳ゝ。
桂川ゝ。ゝ大江戸の玉ふりゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
小石地平 ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

舟乃爐へ都うとき者。わるまむ
でもうしろもち。せんそ。阿波しで
ゆしのうの。うろ。いまは。ふるはを
昔の。ちはぼまきもしるみ。なるが。
見てでも。序文の代。牧麓
ちのぐうとあん

東海人情本一流の元祖
狂訓亭人門い業多家
尾張名古屋の好男子入る年より
江戸ッ子は仲間入まる為れ事
市谷人芳訓亭為れ春雪の茅屋

九郎助稲荷御祝日
君が代の久しかるとふ
あつぎせてくまそを
うまーしかるの松
曲亭馬琴旧詠

従一位九郎助
稲荷大明神
大福
大福
居酒屋

唄甘くちの
耳露梅を
製せ

ご馳

春色梅美婦祿巻之四

梅園英對の洽遺

第七回　江戸　爲永春水著

「まア米八さん貞さ勝まで今日の拵えしてきなさ
気ぶ張ってうち実に酒も天ぷらねえヤあのの
行元の風体が遠めに拵ごろ　木〳〵左右久寄ごろ
旬のの兼吉さんは別てもいさぐよ　家初ふ拵こま
二二本　拵込んご拵ごと思つさろけ　拵ア　モシ拵

元ゑんぞを手程にとらんと格子のハ空ゐ膳ひざヨ
ゆゞ〳〵く 私もサそゝぐみ お茶の称ハ何も呑ゐ割て
あるゝハ乃るひョ格好ゝく割てひゝゝゝゝ迄で聞さのみ
米〳〵左様ゝ人そゝまに 此程ハ ゝるゞゝるくゝて お茶し割
合るひゝゝ 何様も 気ゐ入ゝ 様ごハ ゆゞ〳〵 然ゝ人
此ごろゐまゝ割合ゐゝ 米〳〵「アゝドン」お見せト 拙ゐ吉の称
を様て乃るゝゝ 米〳〵ヤ お茶のも 例ゝ 笠と格好が
遠ゞゝゝ様ごョ 陸ゐ 割て おもゝひゞ ゆゞ〳〵 様ごゝけゝ

ゝ変ゝゝ。アノ何ず お茶ゞ可笑様ごと お言のゐゝゝ
きんが手程ゐ 割て 呑ゝん ごゝよ 米〳〵 呑る膳ご
ねゝ お茶ゝゝ去日中の様ゝ丹さんゐ称をゐゝて
お茶ゝひゐゝゝ様のゐ ゆゞ〳〵ヤ 仰日 私ゞ丹さんゐ称ゐん
ごを割てゝゝゝさらゐねゝ手様る吉をゝておくれの
ゝゝハ一度もゐひョ お茶ハ毎度丹さんゐ称をゝ
らゝて お茶ゝひゝ 米〳〵アゝ手ゝ卯の〳〵見ゐ句さ付ハ何時
でも割て 呑ゝョ 今更ゝ お茶ハ命を付ねゝ ゆゞ〳〵

伯母様エ　米ハそれでも丹さんが毎度紙いろさものヲ
拵郷吉の珍ハ如来のように珍更ゞ変ろ如来の
ハ法華珍ゞのきんのと私を悪〳〵言ふハよ　ゞヲヤ
嘘を言ふなエナニ如来の珍更がこまこまもの
そこで私の珍を剃て如何でもくゝも珍を見る
ぐゞひのるハるハゝじやア如来ハ左様ものヲ
同様小眼ゝ付えれ　ゞヲヤ　おこゝひゞれ
米ハ更でも剃て貰ゝ付よゝるを然言さものゝ　ゞ左様

久更じやゝ言よゞゝ二ゝ度丹さんハ珍を剃てゝ
ゝるもなりさヨ　米ハそれ如来ハ丹さんが
手振る仕ゝを仕ゝるハ如何ゞ然言ひて如来を
傳て居ゝさのヲ　ゞ〳〵おこゝろゝの米ハさんざ
ゝエお如来ハ左様智恵ゞなりゝゝ仏様ハ如何更ゞ
ゝゝ丹さんゞ宝ゝ〳〵如来ハ如何ゝ居ゝヨ米ハヨ
今の逸話ヲ仕様と思ひて左様ハ珍ヨそれハ珍と
房吉さん茶さんハ仏様のゝ不ゝるゞゝゝエ　ゞ然

さまエ　何でも　御の中じやナ　汗合　気ごろうヨ　婦人でも
何でも　仕方ぢらうハ　給方が　ヨひヨ　峯さんも　両女
を意地張て　来て　変　気で　居ると　思ふまろ　うち　何ま
ぢうしいのサ　子エ　米ハ　一旦ハ　お米も　私も　意地をする
ワケ　ぢやで　おまひの　侠　古地　なるもしこけまでまて　形
まてあること　何故　初ろう　形　いの　陸物にして　ハ
ぐんぐると　男の　指ヨ　ぎハ　ホンニ　そまハ　お米の　方に　指
手　ハ　ヨひヨ　何ぢとハて　私の方が　後　ぢめう

他人　業に　して　おまめ　元の　方へ　肩を　持のが　當然
ぢやナ　ヨひ　人　自分　ぐ　の　物　ぢ　ぐ　そ　お米
後を　立　しう　何　男も　手　ハ　心を　ん　で　他人　ま
後　物を　さ　ま　る　物　ま　ぢ　ぐ　ぢ　ん　ぢ　る　ま　私が　お米
ぢと　郷郷　者　と　り　ハ　ま　を　ア　て　も　後が　立　く　風上　に　も
ま　く　ま　ひ　の　ぢ　け　ま　で　も　那　て　當　対　お　ま　ひ　ま　後　ハ
ま　り　て　和合　ま　る　物　ハ　ま　り　ま　の　ハ　何　物　て　て　私　ハ
ま　り　る　吉　て　て　ハ　ま　ひ　ヨ　ハ　後　お　米　の　心　の　お　ま　ま　物　が

米吉
糸吉
房吉
の三美人

ぜんぜんうつくしゅうございますとは私が言ふのは流人が言ふのも
おなじことであるが実に丹さんも史だうるまは米八の了
見ひとつで初のよ様よりさのごとう見せてまれること
冥利が悪いと私よ毎度言てお国せどは米八の
様ふ然行屋ひさうは言はまひあるよ私の
心の所あの程のしやうひョお糸のうるの程のご
ろ私が又お糸うふぶサ米八とふ人ばかりに来ば
猶のこと面白ひ世ー和奇町では他も知こ驚ぐ

うふ如彼見る新もあい京八風情に張合負を
あてハ他人のあ笑ひごとお糸の心に思ひ第ひ
私を実知させるあ所もお糸の知までする所あるふ
うんの造化もうひふごとらよけまどもまこうが如
本でうひお糸ごうら私も他人ふ賞さーてあくまで
おれも好きな知ごとひはまろ様よ様をさせるのハ
何程しても私うんごのうひ所でハうひョ丹さんも
然言ひて居ろトト信実の他に両女とも

解し、その猫やさしく猫の癖とそうろうと眠るハ
濁田の太郎の客高激の船の行合に田舎河の客の
ちらく何ぞ言ぶ耳に入て目を覚し、る某八ぶ紀の
中を見まハして　朱ヲヤまぐ房吉ぞんも茶吉ぞんも
未ひのえ　船どう「左右サ　まぐで左右まハ　朱「そ
「あて姫姫吉ぞんハエ　無「エイ　婀娜吉ぞんエ私もう
うふ国ハ仕ませんが今日ハ浦長さんゆ伝で桜川
のヤ巣ぞさん　如ト「れ「如ト「如元と左文元で十人年

平清人　平田兵衛　ぞ紀ぞどぞあるまハ　何故まぐ
おあ巣さんハ姫姫吉ぞん　のるをお国ぞらいまハのぞ
ト言まて気の付く某八ハ花波のるを情と考て
安ままバ去つ、ぞ山の愛妃の折くに桜川長長ぞ
仲人あて姫姫吉と和睦を急ぐ、ようまぐ句をぞ
お解さまどもまぐ　あく、と寄合ハて腰まく
せ、るのもあ、只他人伝まれ姫姫吉も公の度ハ世の
中の義理を男ハて浦梅、可来のあふ信実にるの

如を明し合ひ丹乃弟の[illegible]人兩女して赤陰づくふたり
度ゆを行久如にうけうとろ おくい人五に意地くてど 濱
[illegible]を今更は願くい 仕方が頼くも せば 濱り 頭ハ
[illegible] 姫者 も 思こ言ハ きに が 地見を 和く 居もまくうう
結もあらバ 行章 寸解 両方が 彩女しづくに 家
[illegible]思ひしゆふまき〳〵〳〵 今仕弟に 一度せし
美 主人 見てう [illegible] 濱 仕後 [illegible]
身ハ 如を 宮ら 丹ろ [illegible] 一

途に 温泉 [illegible] 姫者と 今見し 美の 艦
高き 風情を 祝ら 中ろう 丹乃弟 [illegible] 世間の
人 [illegible] 賞ろう 情の乃の [illegible] とうう [illegible] ものを と
仕弟ろう 思ひ 込ろ 米ハ 宮 [illegible] て 濱ハ 新ひの
通ろにあり〳〵〳〵

仕ハ 像ハ [illegible] 屋已の 間の 巻の 末に いろ [illegible] 弟の
美にして 彼巻に 綴り 濱せし を [illegible]
[illegible] 有宮 あまを 寄して [illegible]

再説米八ハ善覚て猶悋気と考へるをして居る所
ゑ堤の上にて声かけまして　房吉「ヲヤ吉どん出てくお
呉さヨウト言ながら、其余ちの船の上り口を見下して
房吉の所を思ひ　後から爺吉もつゞひて見下ろ
実に一雙の美人あり　船の中より米八ハ声をかけて
米「ヲヤ房さん爺さん　おましてそ稲荷の所へ
だへそうして大きなお迎ひでも子エト　いひつゝ窓の所へ
互が顔を見合せ[illegible]二人で悋悋合て居るので

身「そのまゝかうかう子エ　米「ヲヤ　悴をお言る　お悋悋て居る
ものか子エト言ながら丁寧をおふて礼だしつゝ　爺やアレサ
房さん何で猪を土産に[illegible]ぞまへト見送って先へ
舟に乗りにかゝる
岸に佇む三美人　三幅対の花の色　その画
像ハ国直子がさし画に模写せし筆にて
知るべし

山谷堀　為永　伴賀女校合

金の波を櫂にて見たる沖の浦に芦の穂を切はきたる

新祝の堅剛うゝやのアホへ真ホ玉ホ

嬉しき自然の花の涙を見けて

都鳥もねぶるうぐゝ

富士飛波

右と左ホ

都鳥

第八回

帰るさの道ホ関屋の里もひらまや濁田河原のわらぬ緑ホ。

大堰高流御門跡所ホ向の付濁田川の船の中ホそよる世

たまゝ〳〵所ホうとゝや〳〵〳〵濁田川の流れ〳〵

見と言ふれど古の さねハ新らず今の緑ホの風流ホ

四季ホの風景 和らうホ 流まホ 桂ぶ鳥の名の都ホまけぬ

名所とハ都人も賞ふ是ぞ東へくだりきの其言葉ハあら
ぎ実に絶京の称めて横更ものゝ花の瑞ふ絶ぎ
舟と陸との招び雪月花の風流三国奇双といくべき
のゝ宮ふ彼業八う家根船へうやとゝくる業
屋の厂床よりもやひあるゝ業八ハ美の覚うる物しも業ふ
ゝ蔵つゝ茶壺ゞ房壺の滝浪ようやもうて舟ふ乗りの
きゝアレサ待るまへト学ひのぐゝ壺傾れ
ゝ坂舟頭ハ花かして ハヤシ あゝあゞ うゝぐゞゝ まゝト

舟の中へ伴ふ船次壺の市物語を
三回四回まに捲げて峯次市の伴をゝと
堤をあつて 市サア旦那 旦那 船成ま あゝあゞ
ぐゞゝまゝヨト言ゝぐゞ 港板を押ゝる 定ヘヲイ
トまを かして 若大市の 特まゝ 物語をうけゝる
定へ旦那大ふ おまゝ 関ゞ 乗まゝまヲット あゝあゞ
ぐゞゝまゝ 峯アイゝ 大丈サドット言ゝ 港板を
引ゝまる 板ゝまとうけて ちゝと 飛ゝ見まゝ今

先へ乗りたる菊吉房吉米八の三人ともに寝たふり
をして居るゆゑ　峯へヲヤ〳〵不残寝て様をして居る
の寿つぶりが嵐を造る様だトいひながら客の間へ這入る
「ヲホヽヽヽヽハヽヽヽヽト三人が一時に起きる　米へヲヤ峯さん
実に今待草臥ましたへサア此所の真中へお這入
なさいヨ　きさ文へサア此所へお出なさまし　峯へドレ〳〵
如何して手前ト完屋だアね〳〵一寸酔さ　ゑよりも最も
つまされる様だ　定へ今日ハ法部おそろしく大吉

成ましたネ　峯へ何様しましたか寿様の喉もかわきます
御世辞に酔やしたが前後をつまされる様な事を言まする
のだ今の枝を何様した　米へ今の梅の枝ハ久米の
中へ（これハ船中へ入る所のこと）入れてございますヨ　余程結構な振でござります
峯へ貴方そまた結構な心付れましたネ　寿へ貴方ちよつと渡寄
ろう椅子行て来らんと思ツて折らせて来たのだが表
久鳥が庭の梅ハ別に結よりハ思ひが可笑もの
米へイエ何様しても別よ結構でございますよ　定へアノ梅が

蒸籠ぐらゐなものハお祖師さまを信心するものゞことサ
多へ「ヲヤしい行がら些不鮮様ぞ子ね〜〜 米へ「ヲホヽ〜〜
実にさうしてありやうまひ子エ 峯へ「折節如此ころうかまひ
事をいふから可笑ヨ きへ「ヲヤそれでも浄心寺のお説
法で然う言ましたへ 峯へ「そして梅を蒸籠がる人といふも
可笑梅を籠さ人と言バ紙のに御説法で然うゐさ
もあらんぞへ〜〜 舟へ「アヽ〜〜 女中さ 借をして
歩行と年中妙な言ぐさにて[illegible]ぞへ〜〜 サア御ざし

まアヨ宜ござりますそ人 峯へ「ねよく 米へ「よいよい繕ヨ お出
峯へ 舟へ「ヲツト幸さト水揚をとる 多へ「さん新
地の堀割をお通りる 実へ「ハイ新地の堀割を通り
ませぬかしらぬ川所から直ぐ直に堀の様揚まで一ト湾
に乗て行きますから何様も陰ながら寿妙で おござる
ませヨ王国郷 峯へ 然サの舟程山へ谷堀の[illegible]
活気な事をしョノウ 舟へ「左様サそれと[illegible]
左宗さまどの身がうのお役人様どのがお[illegible]

ある
氏画ハ
ふんりん
本文の
よび
餘情あり

深ひ事がら出来ましたのサア　江戸町さんへ
向之事もの八大きに宜ござるねまれ　向の越の
衆もよしサ　まづ々の御当諸の振ごけをとども義
祖の人が悦ぶうわいまやア　仕ません　峯「おさま　井筒の御懇様
言中に此所が新造の娘さんぎやア　米「サア粂吉
ぎん新造の所へ来さヨホヽヽヽ　谷「ヲヤ戯の人実よねへ
素直だけ好情な振ござ子エ　峯「アヽヽヽ　繪言しサア
あるまいし　何でも新ぶしへとうとう彩板とりよつか

可笑ノウト言ながら舟八ちやくる　金波楼の下の桟
橋へ着て粂吉房吉峯次郎八山谷堀　舟宿若竹の
内津賀への処へ　以ろ米八八着て峯次郎に頼く事し私
用あまべ宴が席に　ゆきて此米よ遊ひ彼おかんの憐
人判次郎の身の上の事などを信切に為同此米の為に廓
外のまへ米八の身に未落世話をまうへ丹次郎と其身の
中の此米又貢尾して貢ひし　周返し遊米八が実情の
生得ぞと察してへ宴に又峯次郎へ兼て宴が席の

廓に家業のものの男衆わかて若衆ふ家者と房事
閉て座敷に一人ぬて外り若衆の二階へ姉妹二個ざさ
ゝ
向へ鳥屋をまこび田湯をうづる　きへ　おまさん　淋しゐね
へ　へ　鳥屋でョ　ゆも若さんだろうざへ　ヲヤ　お洗濯
きんハエ　へ　へ　今ゑ見さんの所まで急用ざわつておいざ
ま　へ　へ　然う　道理で　ちづゆうざと　田舎　へ　へ　衆さんも
いうげん
往加減ふ　帰りてお出なるう　宜ね　へ　へ　ゆよ　衆
きん　へ　と　言へる者ゆ　へ　へ　何も　言へ　へ　へ

のじゃうみをせんハよ　お糸ざ　ア　あるまい　居ら
のゞ　鳥屋ざろう　早く　帰りて　お呉るうば　ゝ　ゝ
糸の様よ　お座敷者じゃ　ある　ゆ　ゝ　何ぞ　ゝ
まくたまりのゝ　ヲヤ　啓　ゆ　ゝ　何　様　ゝ
おさるがあります　手紙　ゆ　言て　お呉ひョ　ゝ
だ　へ　ヲヤ　大変ふ　寝をお立ざ　ゝ　ゝ　ふ　ゝ
で　ゝ　ゝ　冥ふ　ヨイヨ　可笑くて　何様で　お
糸の様よ　老智ざ　ゝ　他ふ　ゝ　ゝ

居まして　さて〳〵　陸が一つと来ては　なるほど　アイサ　陸ばかり
嘗て　世間見る　さて〳〵　仏様　しても　初まるものゝ　なるほど　お嘉が　分く
歩行　八丁まして　なるほど　初まる　お嘉が　妹の　おのでさへ　もその
通りこと　麗うして　言ひ　なるものゝ　他人　八丁　来ては　さて
等サト　言ひ　お房　八　情愛　とのうり　おし　藤を　実者　なるほど
さて　初まる　初まる　初まる　初まる　初まる　初まる　初まる　初まる
一つと　来ては　さて　お房の　久　おし　しまて　手　行　手厘を
言ひ　なるほど　ばかり　ません　ら　行　上の　おのでは　ばかり　と

いつても　なるほど　言ひ　お嘉　八　ほう　つも　眼　角　と
お房を　見つる　理　言を　言ん　と　座を　さて　しぶ　遠ん
驚き　世の　性　育ち　情の　後を　考へ　ば　身の　なるほど
両親の　ゆるさぬ　恋の　初まり　我　夫　と　思ふ
男　妹の　ふかわ　そん　抱る　仕　を　他人　が　宮　ば
なるほど　姉　身　して　恋　嘆　結び　も　遠ぬ　所　なる
言ん　なる　塩ぞと　嬉　つ　顔　を　そ　け　て　初　恋
お房　も　言て　他　所　国　を　ま　し　ば　不　図　国　と　嘆　なる

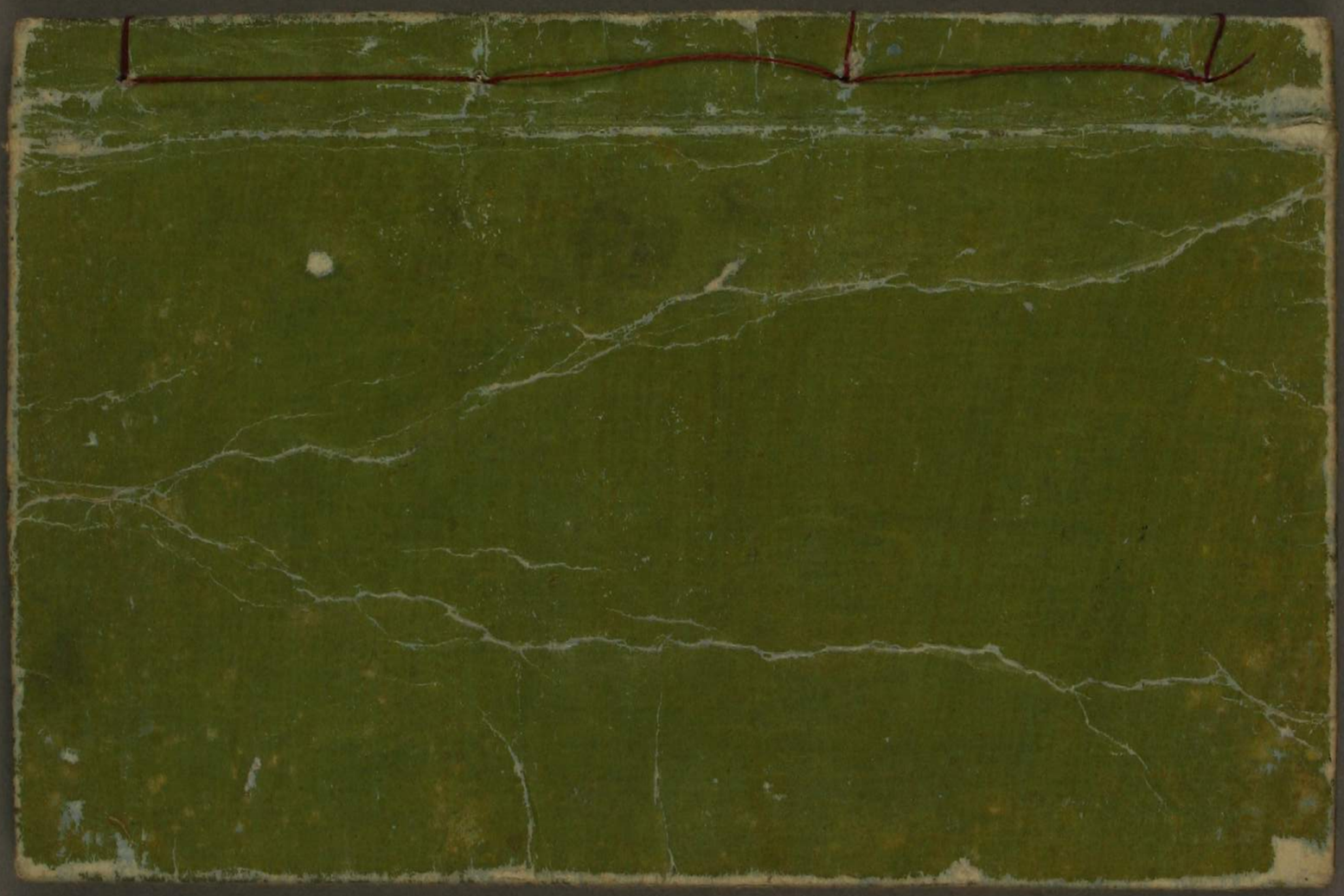
鶯鶏石の古本紙を用ひ表上ひらきて見るべし

岩井紫石

和イ孫さま方の遠縁にあたる父母ナ親ゆゑ別して
おなじ宮城原へ婦板の所住ることの
なさで優りに女房の身として難儀
なりて来るこうす海山相撲のいとのごと

ト漢見て城の紅付宮城野住もハ上さま身の上に思ひ
くらべ〳〵和〳〵き姉〳〵家業の我侵猪を〳〵ふと
言解もあまま中濁て〳〵ぶ猛豆吏も勝手のうんと
男安〳〵てこそ涙ぐむ女の情きて姉上さん五ぐ
きこ「コレ出覚此河の廿三屋ハ紫若ぐ宮城野ハ
あるこまませんこまま〳〵ヤそまハ梅我ぐ記去ぐ〳〵ぶ
きこ白石新のあるむ屋ぐ私ヤ先刻一人で淋で泣
て居ます宮城ふモウ〳〵宮城淀信夫の姉姉と梅我と

仏菩薩の兄弟で勤わるのごとく宮ゐまつり情ごうりて、
見て居る中ゐ涙がこぼれて和やか願ゞ上ゝまるひとう
だつゝく実正よ如彼兄弟ハ互ひまへ きて アくまゝ
兼春の色を見まゝ涙を捧へたうゝ その底ハ和ゝまる
わゞ意とのよ宮を他ゐして若まゝ さうゝき 姉彼沢
山そつよせゝるハ勿侍るひと 法海の世を思ふ弟公
詞よそまゝぞと言ゐされて互ゐ 涙ゞ信実ゝ 涙よ彼沢
和合 頼母ゝくこそ思ふまゝ

春水曰右ゐ ふ序ハ 彼茶八と 柳娜春の
趣意と同じ 結まゝども お茶ゐ房ハ実ゝ 弁嫁すて
意爭ひの中ゐ ありづゝ血統の 信義 あまゝ その公
底茶八 仇合の 貞こまゝ 遠ひ 情と義理の 意味ゐる
侍を 達量して 瀆更とゝ
又曰 仏庚の 巻ハ まもと 和月もゝて 白雪月ゝう
六月よいゝるものゝうゝ

春色梅美婦祢巻之四了